

序

昭和初期における「日記文学」という枠組みの創始は、そこに包含される作品群の、物語文学に比して明らかに低調だった旧来の研究を飛躍的に進展せしめる、一大転機だったと評することができる。しかし、「文学」としての価値が作者の自照性に由来するという立脚点ゆえに、原作本の解明には寄与しない多くの資料が半ば等閑視されるに至ったことも、その枠組みからもたらされた負の側面だった。そのように不遇を託ってきた資料を繕くことによつて、当該作品群が「日記文学」として扱われるよりも前の姿に光を当てるのが、本書の目的である。

前著『和泉式部日記』を越えて（勉誠出版、二〇一五年）において拘泥した「日記」と「物語」の峻別から敷衍して、他の平安仮名日記についても「日記文学」の枠組みを排して資料を見つめ直す必要に迫られた所から、筆者の問題意識は出発している。総体から見れば本書で扱う内容はごく一端に過ぎないけれども、次の展望を拓くためのさやかな指針として、前著刊行以降の関係論文を纏めて現時点での体系化を図ることとした。

本書に収載するのは、『更級日記』『和泉式部日記（物語）』『蜻蛉日記』の三作品と、近世期における受容に大きな役割を果たした和文叢書『扶桑拾葉集』、および国学者の横山由清をそれぞれ対象とする、平安仮名日記にまつわる十一篇の論考および二篇の関連資料である。以下、ごく手短に各章の要旨を記す。

〔更級日記〕の論

第一章…：現存写本の巻末勘物における誤写から、共通祖本である御物本以降の本文変容のあらましを示す。

第二章…：『扶桑拾葉集』の本文編纂を起点として、それ以前・以後の近世期本文の動きを明らかにする。

第三章…国学者による「古本」への関心が、いかに拡散し収束したのかを現存資料から見定める。

第四章…御物本に次いで最古とされる小汀本の、現存唯一の同系伝本である徳島県立図書館本を翻刻する。

*

〔和泉式部日記〕の論

第五章…寛元本・応永本系統の異文を手がかりに、三条西家本では生起しない文脈理解の可能性を示す。

第六章…三条西家本の書き入れ注記箇所が、親本以前における本文改変の痕跡と目されることを述べる。

第七章…現存の絵入り板本を概観し、版種をめぐる誤認を正した上で本文復元上の価値を再確認する。

第八章…かつて所在不明であった木村本の再発見を契機として、その親本である黒川本の伝来を辿る。

*

〔蜻蛉日記〕の論

第九章…未紹介伝本である碧洋白田甚五郎文庫本が、第一類C系の新たな祖本推定に資することを述べる。

第十章…中巻・下巻が残欠本である碧洋白田甚五郎文庫本のうち、全体が残存する上巻相当部分を翻刻する。

*

〔扶桑拾葉集〕および横山由清の論

第十一章…『和泉式部物語』の本文混成における使用伝本を推定し、『扶桑拾葉集』諸本の系統関係を定める。

第十二章…新出伝本の歴博A本・B本から、『扶桑拾葉集』の靈元天皇・幸仁親王への献上経緯を見通す。

第十三章…横山由清による平安仮名日記の書写・校合に、背景として日下田足穂との関係を見出だす。

中世から近代に至るまで、各章の内容は関心の趣くままに拡散しているが、すべての根本に「平安仮名日記の本文

は、どのように受容されてきたのか」という問いのあることが、「本文考」の書名を冠した所以である。

各章の収載順は、右の通り対象とする作品毎としたため、公表済みの論文については執筆順が前後する。このことから、関連する章の相互参照によって旧稿の不備を補えるよう、各章に新たな注や追記を施している。ただし礎稿からの大幅な論旨変更はないため、いずれも全面的な改稿は行っていないことを諒とされたい。また、伝本略称などは重複を避けるため凡例に示すように統一を図ったが、論述の反復については礎稿のままとした。

最後に、本書を成すにあたって貴重な資料の閲覧と掲載をお許しいただいた各所蔵機関、および本書の出版をご快諾された合名会社武蔵野書院ならびに編集をご担当いただいた同社本橋典丈氏・平山あゆみ氏に、御礼を申し上げます。

なお本書は、JSPS 学術研究助成基金助成金（若手研究・課題番号19K13982）による成果の一部であり、同科学研究費補助金（研究成果公開促進費・課題番号23HF5030）の助成を受けて刊行されるものである。

二〇二三年十二月

岡 田 貴 憲

目次

序	i
凡例	xiii
第一章 『更級日記』 本文変容考	
一 御物本巻末勘物からの誤写を手がかりに	1
二 『更級日記』の現存写本	2
二 脇坂本と御物本の関係	7
三 二次共通祖本以降のグループ派生	11
四 直方本グループと系統分岐点の想定	15
五 鎌倉期における本文変容	18
第二章 『更級日記』 近世期本文の伝流	25
一 彰考館本の本文混成	25

二 『扶桑拾葉集』所収本の本文変化	29
三 絵入本・『群書類従』所収本の本文変化	37
四 古本の素性とF本との関係	42
五 総括と展望	47

第三章 古本『更級日記』と国学者の系譜

一 古本の本文配列	51
二 現存の古本関係伝本	53
三 俊明校合本の系譜	59
四 滋古所持本の系譜	63
五 系譜の合流点と分岐点	67

第四章 徳島県立図書館本『さらしなの日記』翻刻

75

*

第五章 『和泉式部日記』異本の二様相——「情けなからず」の解釈をめぐって——

125

一 平安人と「情け」	125
二 「情けなからず」の系譜	128
三 『和泉式部日記』の「情けなからず」	134
四 もう一つの「情けなからず」	138
五 『和泉式部物語』の言説	142

第六章 三条西家本『和泉式部日記』の書き入れ注記

145

一 議論の前提	145
二 併記の書き入れ注記	148
三 訂正の書き入れ注記	152
四 補入の書き入れ注記	156
五 諸注の採用態度について	163
六 おわりに	165

第七章 『和泉式部物語』絵入り板本考

169

一	刊年と板元……………	169
二	伝本の残存状況と特徴……………	172
三	元文板本・無刊記板本の問題……………	183
四	丁付と挿絵……………	186
五	本文……………	190

第八章 木村正辞筆本『和泉式部物語』とその周辺

——横山由清との交流から黒川本の伝来へ及ぶ——

一	木村本をめぐる憶測……………	198
二	木村本の書誌と伝来……………	200
三	木村本の黒川本転写……………	202
四	横山本の木村本校合……………	205
五	黒川本の伝来……………	210

*

第九章 『蜻蛉日記』残欠本小考——碧洋白田甚五郎文庫本の位置——

一	『蜻蛉日記』諸本と伝本系統……………	221
二	碧洋白田甚五郎文庫本について……………	223
三	上巻本文の検討……………	226
四	中巻・下巻本文の検討……………	230
五	系統上の位置……………	234

第十章 碧洋白田甚五郎文庫本『蜻蛉日記(一・二)』翻刻…………… 237

*

第十一章 『扶桑拾葉集』所収『和泉式部物語』の本文

——主要伝本の関係と諸本混成の実態——

一	はじめに……………	273
二	編纂の経緯と主要伝本の概要……………	274
三	主要伝本の関係……………	276
四	諸本混成の実態……………	283
五	おわりに……………	294

第十二章 『扶桑拾葉集』異本成立考

——国立歴史民俗博物館所蔵本二種を手がかりに——	299
一 はじめに	299
二 新出伝本の概要	300
三 歴博A本・東博本と靈元天皇献上本	306
四 歴博B本・御所本と異本Bの正体	313
五 おわりに	318

第十三章 横山由清と平安仮名日記——日下田足穂からの蔵書継承の可能性——

一 横山由清の書写・校合活動	325
二 由清校合本『更級日記』の詳細	328
三 日下田足穂と岸本由豆流・由豆伎	332
四 井上文雄の介在	336
五 由清による足穂蔵書の継承	339

初出一覧	345
------	-----

索引	㊦ 001
----	-------